The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	臓器移植医療と人体の経済に関する人類学的研究
Author(s)	山﨑, 吾郎
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49447
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【４】

氏　　名	山　崎　吾　郎（やまざきごろう）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学　位　記　番　号	第　２２４４３　号
学位授与年月日	平成20年９月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学　位　論　文　名	**臓器移植医療と人体の経済に関する人類学的研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　春日　直樹 （副査） 教　授　中川　　敏　　教　授　栗本　英世　　教　授　池田　光穂

論　文　内　容　の　要　旨

本研究は、臓器移植医療の実践を民族誌的な観点から考察し、移植に用いられる臓器をめぐってなされる認識の成り立ちや規制の特徴について論じる。そのことで、「人体の経済」と呼ぶべき領域がどのようなプロセスから生み出されているのかを明らかにする。医療技術のめざましい発達が人間の身体に新たな介入の可能性を開きつつあることは、今日では広く知られている。薬剤投与によるエンハンスメント能力開発、コンピュータチップの埋め込み、遺伝子治療やセラピューティック・クローン、また精子バンクや代理母を含む生殖医療、そして人工呼吸器の取り外しにともなう安楽死や尊厳死など、新しい医療技術はこの２０～３０年の間にいくつもの問題を提起してきた。こうした技術が急速に広まることにともなって、「身体」だけでなく、「社会」や「経済」、そして「自然」や「人間」についての新しい問題設定が生み出され、同時に新しい認識が要求されていることは、研究の主題としても次第に取り上げられるようになってきている。本研究は、これら医療技術の開発と受容にともなって生じる問題の中でも、とりわけ早い時期から日本社会において繰り返し取り上げられてきた脳死・臓器移植医療に着目し、この医療技術の導入にともなって、死や身体に対するどのような認識の変化が生じ、また、いかなる価値の衝突が生じているのかに焦点をあてる。

本論は、以下の５章から構成されている。

第１章では、臓器移植医療に関する歴史や日本における制度の特徴を整理した上で、先行研究について検討した。また、本研究の問題意識とその背景を明らかにし、調査の方法について述べた。日本では、臓器移植医療に関する議論は1960年代の後半から繰り返し論じられてきた。そしてその議論は、一部の専門家の間で関心を呼ぶだけにとどまらず、広く一般市民を巻き込んだ科学論争へと発展していく。以後、法律が成立する1997年までの

間、断続的であったとはいえ、長期間にわたって広範囲に社会問題として取り上げられ続けてきたことは、世界的にもまれなケースということができる。しかし、議論が広範囲におよび、解消しがたい意見の対立がみられた論争は、合意に至るというよりは、一定のこう着状態を保ったまま制度的な解決をみることになる。この章では、一連の論争を通じてとりあげられてきた論点を振り返り、論争の「解決」がどのような意味を持つのかについて改めて考察する。また、法律が制定されてから10年が経過した現在、問題の構成がどのように変化し、現在問われるべき問題がどこに位置づけられるのかを、歴史的な文脈のなかで明らかにする。それは、本研究の出発点を確認することでもある。

第2章では、本論の主題となる人体の経済が、社会政策としての贈与経済という特殊な形態をとることについて、関連する学説史の検討を通じて、その歴史的変遷を考察した。輸血政策に端を発する人体経済の議論は、これまで贈与論と商品化論という二つの代表的な理論的立場から論じられることが多かった。この章では、臓器のやり取りの特殊性に注目することで、人間の身体を扱う経済活動が、単純に贈与と商品の二分法では区切ることができないことを明らかにする。そして、新たな経済領域の確立に際して装置（dispositifs）が果たす役割に着目し、人体の経済を論じるための理論的な道具立てを模索した。

第３章では、臓器の提供者に焦点をあて、彼らが置かれた立場や、彼らの行為を可能にするさまざまな装置の働きに注目しながら、身体が資源へと移行する場面で何が起きているのかを記述した。臓器の提供がおこなわれる場面とは、臓器がからだから切り離されて一つの「医療資源」として流通をはじめる瞬間である。切り離された臓器はいずれさまざまな意味や関係性を新たに生み出していく。人間の死に関する概念を変え、身体についての見方を変え、さらには医療構造全体を再編していく契機となる。臓器をめぐって作り出される社会関係のなかでは、ドナー家族が、臓器を提供したという事実によって独特の苦悩を抱えてしまうことにも触れた。人体の経済のはじまりに関わる実践が、人と人工物の異種混交的な集合体として成り立っていることを明らかにすることで、治療行為の裏側で生じる苦悩の経験がもつ意味について検討した。

第４章では、前章とは対照的に、治療の恩恵を受けることで回復したレシピエントの立場から臓器移植医療の実践を考察した。レシピエントの身体経験は、ネットワークを介して匿名の状態でやってくる臓器を、自らの身体として認識しなおす実践である。そこで語られる「内なる他者」の経験は、レシピエント個人の身体認識にとどまらず、ドナーとの社会的な関係と密接な関わりをもつ。自己と他者、身体と社会の境界がゆらぎをみせる場面をとりあげて検討することで、臓器移植医療によって開かれる新たな身体と社会の秩序について論じた。その際には、象徴としての臓器がもつマテリアリティに焦点を当てることが、重要な論点となった。

第５章では、日本における臓器移植の特徴を示す一つの典型例として、海外へ渡航するレシピエントの実践が、どのような医療空間を作り上げていくことになるかを取り上げた。海外渡航移植の事実を直視するとき、移植医療を従来の制度概念に依拠して分析することができなくなっているということが明らかになる。患者がいのちを賭けて行う医療実践は、既成の制度との間に新たな関係を生み出し、また同時に、それにともなう問題を作り出している。海外渡航移植の実践を検討することによって、今日の臓器移植医療が抱える困難がどこにあるのかを指摘した。そして、商品と贈与の二分法に依拠した人体経済への批判が、既に現実に対する批判機能を有していないことを明らかにした。

以上、本論では、歴史的文脈の検討からはじまり、人体の経済の特徴、提供行為の集合性、レシピエントの身体経験、移植医療の構造的問題と考察を進めた。そして最後に、人体の経済の特徴と今後の展望について結論を述べた。

結論では、まず、人体の経済の特徴は社会政策としての贈与がいかなる帰結を生むかということに注目することによって、民族誌的な観点からとらえなおすことができることを確認した。本研究は、そのケーススタディとして位置づけられる。そして、臓器移植医療の困難が、これまで結びついていなかった人とモノの関係が新たに作り出されたことによって、いくつもの逆説や矛盾を含みこむことによって引き起こされていることを指摘した。たとえば、レシピエントを救うために、ドナーの生の領域を狭めていくような動きがその典型である。こうした困難は再帰的な運動をともなって生じるものであり、その運動の動態を理解することなく、ただ規範的な観点から批判を展開することは、現実の動きに対応しなくなっている。さらに、人体の経済に関する主題は、日本においては特に、臓器移植医療を通じて形成されてきたことを再度強調した。人間の「モノ化」を着実に進行させる経済活動について批判的な視点を獲得するためにも、本研究を一つの出発点として、広く遺伝子治療や人由来新薬の問題など、次の課題にとりかかる必要があるだろう。

論文審査の結果の要旨

本論文は日本における臓器移植医療の実践について、人類学の方法と理論を最大限に活用しながら諸問題を構造的に整理し、提起し直したパイオニア的研究である。

申請者は２００２年以来、各地で一般公開されている移植医療のセミナーに参加し、ドナーとその家族やレシピエントと知り合い、彼らとの信頼関係を根気強く築いてきた。日本移植者協議会、日本ドナー家族クラブ、レシピエントの患者会、「救う会」などのＮＧＯやセルフ・ヘルプ・グループ、ボランティア団体のメンバーたちとの関係を深めることによって、臓器移植医療をめぐる問題をドナー側とレシピエント側の立場から掘り下げて分析するための資料を収集した。

申請者は第１章において、本論文で描くのは移植医療の全体像では決してなく、移植医療のネットワークを人類学者として丹念に追いかけてみえてきた範囲にすぎないと明言する。この謙虚な立場を最後まで貫くにもかかわらず、申請者の展開する議論はきわめて斬新であり刺激的である。

５つの章より構成される本論は、第１章で臓器移植医療の歴史と日本の制度の特徴を整理し、かつ社会科学における先行研究の批判的な検討をおこなう。科学論争の社会性や文化の重視をもちだしてこと足れりとするのでなく、臓器移植の制度のなかで生きざるを得ない人々がどのように医療実践に関わるのかを民族誌的に描くというあらたな立場が、この過程で明確に築かれる。

第２章以降はその民族誌的な実践である。申請者は、臓器移植の制度化が「匿名の贈与」という形で実現したために、贈与に伴うべき返礼の義務が行き場を失い、贈与と売買の区分が不明瞭になりやすいこと、それゆえに臓器の提供を贈与か商品かの二分法で決定づけることが不可能になっていることを明らかにする。身体の一部が贈与と商品の間の形態で流通する独自な領域の成立について、これ

を「人体の経済」の「離床」と名づける申請者は、３章以降ではドナー（家族）の側とレシピエントの側から、「人体の経済」がどのような危うさを宿し、当事者たちがこれをどういうふうに経験していくのかを丹念に描いていく。ドナー家族が、臓器を提供した事実によって抱えてしまう独特の苦悩〔３章〕、レシピアントが、匿名の状態でやってくる臓器を自らの身体として認識し直す模索と揺らぎ〔４章〕、臓器の需要と供給のまがうことない不均衡によって、命を賭した患者が海外で移植手術を受ける（受けた）ためにたどらざるを得ない制度からの逸脱と労苦〔５章〕が、さまざまな具体の姿で提示される。こうした諸事例は、贈与、主体、隠喩と換喩といった人類学のオーソドックスな議論に立脚しながら、「装置」（M. フーコー）、「例外状態」（G. アガンベン）など他分野からの研究成果を的確に援用した議論によって整理され記述されている。

以上のように、本論文は先端的なテーマを正統かつ斬新な理論のスタイルで独創的に提起することに成功している。審査員一同は、本研究が国内にとどまらず国際的にも貴重な先駆的業績として評価されるものと判断した。